



三笠を科学する

三笠のボイラーを探し求めて

横須賀の現在・過去・未来を考える会(GKM)

代表幹事 毛利邦彦(毛利塾塾長)

そもそも、横須賀の郷土史を始めたのは三笠保存会元理事長荒川暁一さんと同級会で三笠に繋がりが出来た。荒川さんは三笠の歴史を見える化したいと、ITによ分かりやすいガイドランスに思案していた。その調達を手伝った。その成果は現在のタッチパネルの説明になった。限られた予算では最大の成果を得たと思う。この「相見積もり先」は「億単位」の入札額を提示して来たのにはびっくりした。その後、VRを導入したり、日本海海戦ゲームなど幅広い層に三笠を通して、現代に語り継ぐ思いを「見える化」した。IT化するが三笠にはアナログの日本海海戦の動く模型が今もある。これは内部には電気機械を駆使した工夫をもって、日本海海戦を忠実に再現させている。この機械をゆっくりとみる現代人はいない。ぜひ三笠を訪問した時はこのアナログの日本海海戦の動作を見てもらいたい。如何に三笠がバルチック艦隊を撃破したかの軌跡が分かる。横須賀市民は三笠には一度は行ったことがあると必ず言うが、この「改善の前の話」で今の三笠を知らない。自分もそのひとりであった。ぜひ三笠の見学を。



三笠のIT関係の説明設備

超アナログ設備

「横須賀製鉄所建設現場からリポート⑥

コークスを使用して鉄を溶かす

鉄を溶かす高温を発生させるには、コークスを使用する方法があります。慶応2年(1866年)4月、横浜製鉄所では良質の木炭を大量に利用して熔鉱炉を稼働させていたので、経費が掛かり困惑状態！横浜へ赴任したばかりのフランス人に相談したところ、石炭をコークスに焼けば、高温を得られて便利だと示唆され、そこで予算580両で焼成釜と附属工事費を幕府勘定所へ要求したのです。これを受けて勘定奉行小栗忠順以下の面々が、現場図面等を審査して、5月にはゴーサインが出ました。

もっとも、横須賀製鉄所では前年フランスで買い付けた機械の中に、コークス焼成炉が既に2基分含まれておりまし

GKMから一言

鉄を高温で溶かすには石炭から生成するコークスを用いる。このよう鉄炉をキューポラと言う、コークスを製造には無煙炭を蒸焼(酸素を供給しない)して、揮発分を放出させた石炭をコークスと言う。この石炭は原料炭と言い、製鉄に用いられ、発電に用いられる石炭を一般炭と呼び区別している。

GKMの月報は配布。会員でメール登録されている方はメール送付いたします。また©Watt and Edison にアクセス。©「歴史博物館」をクリック©横須賀の現在・過去・未来を考える会を開く©GKM月報の1号から閲覧できます。(PDF)

GKM顧問 江沢暁彦氏が出版予定

価格は2000円程度、出版はGKM。

発売は7月以降

サヴァチエ



横須賀市
江沢 暁彦

横須賀製鉄所の産業医でフランス医療を日本に導入した、植物学者でもあるサヴァチエ先生の生涯を書かれた本です。江沢先生の絵画作品の挿入。オールカラー。

Watt & Edison

このサイトは京都大学名誉教授が公開された文献を掲載されております。幅広い分野を網羅しております。

GKMには賛助会員(法人、個人)制度があり、活動に協賛していただける方1口1万円以上、何口でも可能です。賛助会員は広告を月報に掲載可能します。申し込みは下記にお願いします。

風洞おじさんの独り言⑥

夏島の風洞の謎は解明されたので、この成果を如何に活かすが次の課題である。ただ謎を解くだけでは意味も意義もない。前回海軍航空技術ミュージアム構想を小さく載せたが、これには意味がある。この構想を政治的、行政的に直ぐに移行するものではない。まずは地元追浜、横須賀、横浜金沢区民の理解と賛同が不可欠である。これは高い障壁でGKMだけでは無理。ただし声を出さない限り実現は難しい。また既に葛城先生が横浜航空隊に所属した二式大艇の移管を提案してきている。詳細な資料を作成して纏められているが、すでに動いている活動である。GKMはこの活動に協力したいと思っている。またGKMは独自のアプローチを検討している。まずは空技廠の役割と意義を民間団体のリーダーに理解とアクションを求めて生きたい。7月からズームによる「勉強会と意見交換」から始めたい。このズームは第三週の土曜日20時ころから希望者を対象に合計「6回程度」を予定している。空技廠全般の役割と巨大風洞および海軍航空技術ミュージアム構想の意見交換である。現在戦争に関する配信は取り扱いに注意が必要。、知識を深める人材育成でなく、香りがする人材の育成に寄与できればと考えている。初回は無料だが、継続的なサービスの提供を行うために有料になるかもしれない。海軍航空技術ミュージアム構想には横須賀を冠しない。技術という言葉を入れたのは次世代に技術への興味と資源の少ない日本に唯一あるのは人材である。次世代への参加を期待したいので、内容も興味と深みを心掛けたい。エールをお願いしたい。(毛利)



河口湖自動車博物館
実物の桜花の展示

江沢暁彦作品展⑥ 「観音崎灯台」



初代観音崎灯台と現在の灯台をイメージ。ヴェルニーが指揮して建築した日本初の洋式灯台。フランスから灯台用レンズをフランスから購入して洋式と言われる。

GKM 役員会の開催
2026年6月21日13:00-15:00、毛利塾にて、毛利代表幹事、加藤(元)、大橋、池杉会計 幹事及び永久幹事の委任を受けて役員会を開催して、左記を決しました。

スミソニアン博物館に分解保存されている「銀河」。
PUYOKUMさんのブログに掲載2010年当時の写真。今はどの様な保管になっているか不明確認にワシントンD.C.に行き問い合わせを行いた。現状の写真を手に入れたい。戦闘機の頭部の写真は、

面白写真⑤ (星野GKM 顧問) 星野昌弘

「お知らせです。本日南極観測船「しらせ」が入港しました。



自宅から撮影

GKM役員会決めた主な内容
毛利代表幹事から提案のあったGKMの会員増強と名簿作成。会費は郵便口座を開設することで池杉会計幹事が担当します。会費は出来るだけ、イベント中、毛利塾にてお願いします。

フランス人医師サヴァチエの生涯⑥ (江沢暁彦)

サヴァチエが横須賀製鉄所に着任する前に幕府から「辞令」が出ており。1865年に横須賀製鉄所の調達状況を監査する柴田日向守の一行をパリで世話をしていた。柴田日向守のおつきの日誌にその詳細が記載されている。パリ郊外の工場視察や会食にサヴァチエも同行している。柴田日向守は理事官としてオランダに派遣した肥田浜五郎の製鉄所工作機械調達の状況を検証するための使節団であった、この使節団は横須賀に関係するが、知名度はない。最初の遣欧使節団に参加しており、外国通であったが、維新後は千葉山武郡に隠居した。柴田日向守の外最交交渉は優れていた。肥田浜五郎にヴェルニーの配下となることを伝達したが、造船機械の購入の裁きはスマートで横浜製作所にて受入検査を行い、双方のメンツを保った。サヴァチエがパリで柴田日向守を接待していたことは興味深い。柴田使節団に同行した人物には寺島宗則、西周らがいる。徳川幕府は欧米に使節団を出したが、同行した人物に明治政府を支えた人材が多い。



柴田日向守@パリ 1862年第1回遣欧使節団時に撮影 国立民俗学博物館所蔵当時の写真は沢山ある。

続通信全覧(ゾクツウシンゼンラン)にサヴァチエを幕府が招聘したことをフランス海軍総督に報告した。掲載されたい。慶応元年八月九日付け文書。(出展)国立公文書館所蔵 続通信全覧巻之二百三十。

続通信全覧とは幕末の徳川幕府の外交文書を明治政府が取りまとめた第1次資料。

会員募集中 年会費 1000円：寄付・賛助会員募集中